

# N・ハルトマンの新・形而上学について

永 島 輝 雄

## 一、序

哲学は人間のための学問である。従って人間の幸福を追及し、人間の理想的生き方を考究する上において、人間中心の考え方を採らざるを得ない。人間こそ価値の源泉であるがため、人間のあるべき在り方をそのまま周囲の植物・動物に該当させてしまう。しかしこの同一視は自然にとって極めて迷惑千万なことであり、人間の一方的押し付けに他ならない。つまりこの同一視において自然は人間中心の価値観に同化させられ、人間に奉仕する使命を課せられることになる。このために人間が自然を生かし自然の幸せを担っているという、自負感さえ人間の心に生じさせている。確かに、植物・動物は人間の管理化によって生かされている。人間なくしては地球上の生物は生きられない。人間は神になった。

同一視の思想には人間優位の価値観がその根底にある。観念論はこの同一視を代表する考え方であるが、ハルトマンによればそれは極めて危険な考え方といわざるを得ない。確かに同一視によって人間の幸

せを周囲に分かち与え、幸せを共同にするという共存意識が働いているが、しかしこれは人間の勝手な解釈であり、人間の不遜な尊大さによるものである。ここにおいて哲学の新しい改造が望まれる。哲学は人間の幸福のためにあること、これを否定することはできない。但し、人間の幸福と自然の幸福を同一視することに問題がある。幸福の多様化を非合理性の名のもとに葬り去ることは、幸福の一方的押し付けである。そこでハルトマンは哲学の思弁的操作を中止して、科学的視点から世界の多様性を探究することを、新しい哲学の研究課題として提唱している。

人間は決して神ではない。神にはなりえない。神であってはならない。科学者の目で自然の中での人間の在り方をありのままに観察すれば、人間は強いのでなく弱いのであり、自然が人間に依存するのでなく、人間が自然に依存することを教えられる。この科学的事実を忘れて人間が自然界への観念的押し付けを強行すれば、自然の運用を乱すばかりでなく人間の幸福をも失うことになる。人間の幸福を真に希求するならば、もっと謙虚に人間の弱さを自覚しなければならない。そ

のためには同一視の哲学から脱却することが、哲学改造の基本的前提である。そして合理的なもののみに真理を認め、非合理的なものに価値を認めないこれまでの古い哲学に対して、新しい哲学は非合理的なものに真理の根源を認めようとするものである。形而上学もここで基本的転換を求められる。人間のためという視点から現象を観察し問題を選択するから、人間本来の在り方を見失うことになる。そこで新しい哲学は非自己・非人間に対していかなる態度を執るかが問われている。人間は合理的世界に安住し、その中へのみ自己の幸福を追及してきたが、これからは非合理的なものに生かされ支えられて生きる、新しい人間像が求められる。ハルトマンの哲学が新・形而上学に期待するのは正にこの観点にある。

## 二、体系の形而上学

ハルトマンは同一視を古い形而上学の根本的特色として挙げ、これを二つの型に分類する。上からの形而上学と下からの形而上学である。前者を代表する哲学は観念論で、上層にある神・精神を下層へ不当に転用するものである。これに対して後者を代表する哲学は唯物論で、下層にある物質の原理を上層へ連統的に適用するものである。どちらの哲学も一つの原理で世界の多様性を統一しようとする共通の誤りを犯している。そこでは思弁的の一面の世界像を一方的に世界に押し付け、それによる人間の満足を得んとする人間中心主義が横行する。人間の心の安定・安心を求めるこの統一要請は、世界を不当に作為する誤り

を犯すことになる。できるだけ早く心の安泰の境地に到達したいという人間の性急さが、世界そのものを歪曲して解釈する体系の形而上学を発生させている。

性急な世界観の満足を求める哲学的意図が上から下へと、また下から上へと同一化を強行するために、世界は合理化されてその矛盾は消失し、一つの目的決定論の下に体系化されて運行することになる。果して世界が一つの目的をもつて進行・発展するかどうか、人間には認識不可能なものであるのに、人間が目的行動を執るという大前提の上に、これを物質の世界へ適用し世界の一元化を達成している。そこには世界の背後に人間の目的があるかのように考える擬人観がその根底にある。更に思惟と存在の一致が上からの形而上学の根本理念となっている。古い形而上学の越権を批判し、そのあるべき認識能力の限界内で哲学することを主張したカントにおいてさえ、ハルトマンによれば把握の形式と対象の形式の一致、観念論と實在論の一致がカント哲学の根本前提となっている。ここでは観念論の哲学的越権が批判の対象となっていない。これがカントの観念的偏見と考えられる。<sup>(1)</sup>

カント哲学は神・魂・世界を形而上学の対象とする。これらが認識対象とはなりえないことを批判したカントは、実践理性の対象としてその實在性を要請する形式で、人間の世界的満足を得ようとする体系的形而上学を完成している。しかしまだ批判されるべき問題が残されている。すなわち実践理性の越境である。ハルトマンは一切の存在者の背後に、一つの統一的存在者・絶対者を問うてはならないことを根<sup>(2)</sup>

本信条としている。従って神と魂の問題は認識理性の対象からは勿論、実践理性の対象から除外して、世界の範疇分析にのみ専念しようとするのが、新しい形而上学におけるハルトマンの基本的姿勢となっている。現象に忠実な世界の範疇分析によれば、世界は少なくとも二元論またはそれ以上の原理が、並行でなく交錯している事実であることが判明する。精神のもつ目的的原理と物質のもつ因果的原理のどちらかを安易に偏重することが、偏頗な世界観の満足に性急に自己安住しようとする、人間の日常的在り方を露呈している。

精神一元論で世界を解釈することは、第一に低次の層のもつ独立性を侵している。精神がなくても低次の層は独立して存在できるのに、これを低次の層が高次の層に依存するものと自分勝手な解釈をしている。従って第二には依存される高次の層を強いものと幻想する誤りを犯している。実際には高次の層が低次の層に依存して、高次の層は弱いと考えられるのに、その逆を真と考える観念的思考を強制している。更に物質一元論で世界を統一解釈することは、第一に高次の層のもつ下からの自由を消滅せしめている。精神は物質に依存して弱いのであるが、物質を材料として上部形成する自由をもっている。物質は質料と考えられるのにこれを形相とする誤りは、本来、形相であるべき精神の在り方を奪い取ることになる。従って第二には精神の物質に依存するのは一部であるのに、これを全体とする錯誤を行っている。

このように一元論的解釈は世界の多様性に合致しない。精神と物質という二元論的区別は明瞭であるのに、これら二つの領域を同一視す

ることは、結局どちらかに優位をもたせて残された一方を無視することと他ならない。これは人間による不自然な統一であり、事実には則した本来の統一ではない。このような二者択一は正當な解決とはならない。両者に独立と自由を保持した上で両者の調和・一致が求められれば、これは事実には則したものと考えられる。ハルトマンは科学的視点の下に、多様性の統一を自然の本来的在り方と規定する。なるほど一元論的統一は明晰判明ではあるが、これは飽くまで人間にとって理解できることの証明に過ぎない。従って人間中心の一元論的世界観が満足できることをもって、明晰判明である唯一の内容的理由であると指摘できる。ハルトマンは古い形而上学として上からの形而上学、下からの形而上学に区分しているが、両者共に社会に存する対立層を存在層へ不当に反映したものと考えられる。

社会的対立の解決を存在層に求めてはならない。社会層と存在層の同一視こそ根元的誤謬である。そこで観念論・唯物論共に存在層に合致しない、人間の捏造した勝手な解釈であることが判明する。両者が明快自明な真理として容認されるのは、何よりもその単純さ、一律化のためである。人間のための哲学が快刀乱麻を断つのは、単純さあつての切れ味であり、もしこの単純さを取り去ってしまったらなまくらな刀と墮する。このような、なまくらな哲学が人間に魅力のない学問であることはいふまでもない。しかし人間が自分勝手な解釈をどのように行なうとも、世界そのものに変化はない。世界の運行は人間の解釈とは無関係だからである。従って人間にとって魅力のある哲学が存在

層とは無関係な一面的世界像を懷いて自己満足している間は良いとしても、テクノロジーの発達につれてこの偏頗な世界観を世界そのものに押し付けるようになれば、自然本来の秩序と調和を乱し、自然の一員である人間までも生存の危機に陥れることは当然の理である。

この自然の道理を理解するには単一な論理によつては不可能である。人間にとつて極めて魅力のない新しい哲学がこの課題を担い、この解明に努力しなければならない。この新しい使命をもつ哲学は第一に、地味で控え目で確実な純粹研究を行なうものである。先取りした結論を現象に押し付け、解決を急ぐようなことをしない。更に一つの特定の世界観によつて現象を分類・整理しないで、あるがままに現象を忠実に記述する現象学の立場を採る。この基本的態度が体系的理論を構築する際に、確実な基盤となるものである。そこでアリストテレスにとつて理論は眺めることであるように、まず素朴に見ることから始めねばならない。もし人間が勝手な問題作成・問題解決を行なえば、現象から解決できる問題だけを選択・構成したことになり、これは本当の解決とはなっていない。

そこでハルトマンは単なる意識現象だけを全現象と考へないで、あらゆる領域における科学研究の成果を重視することを主張している。<sup>(3)</sup>ここでは自己の意識に沈潜し、その中から世界の根拠を引き出すという観念論的思惟は消失し、哲学以外のすべての学問に依拠しながら哲学の独自の役割を求めるといふ存在論的思惟が出現してくる。従つて哲学のみがすべての学問の上に超出して、他の学問とは無関係に哲学

的思惟を遂行するのは、思弁的構成的であつて、現象に忠実な正しい学問の在り方ではない。哲学は他の学問に依存しながら、それらから独立な一つの機能を持たねばならない。そこで、ハルトマンは他の学問の成果に基づきながら、世界を四つの階層に区分することになる。自然科学、生物学、心理学、精神科学がハルトマンの階層理論を構成する基礎学である。これらの学問はそれぞれ独特な専門領域をもち、相互に嵌入できない特有な権勢を保持している。

哲学はこれらの学問の中にあつて、古い形而上学のように独立した研究領域を矜持するのではなく、それらの学問を鳥瞰してそれらの依存と独立を発見し、相互に協力し合う研究態勢を樹立しなければならない。このことが同時に多様な学問の統一を完成することになる。このように哲学は多様の中に統一を構成するのではなく、それを探求し発見する使命をもっている。勿論、この統一は同一視であつてはならず、もしそうであれば多様性が抹殺されることになる。そこで真の統一は多様性との共存において成立するものとなる。哲学者がこのような使命をもつて現象に目を配る時、ある一面は混沌とした闇の中にあり、他の一面は鮮明な明るさの中にある。この両面をそのままに受け入れ、これに取り組むことは現象学者にとつて望ましい学問的姿勢である。それを避けることはできないし、解決することもできない。人間にとつて宿命的なものと考へられる。そこで哲学は三つの学問的操作、すなわち第一が現象を忠実に記述する現象学、第二が自然の難問を明らかにする問題学、第三が問題の解決に挑む理論を、順次に必ず実施し

なければならぬ。

解決とは古い形而上学と同様に、統一である。この統一を人為的に構成するか、それとも探求的に発見するかが、古い形而上学と新しい形而上学の分岐点となる。すなわち世界の統一は古い形而上学が考えるような一つの原理の統一でも、世界の根底にある統一でも、全体性という統一でもない。依存によって組み合わされた層の結合、一つの構造の統一である。従って世界の統一は階層秩序として内面的関連にかかわることであり、世界の体系・組織に関することである。これが本来の統一形態として世界をありのままに、畏敬の念をもって眺める根拠となる。理論による解決とは思弁的に統一を構成することではなく、世界の中に存在する神秘的自然的統一、または人間の生存をも支配する偉大な統一を発見することである。従って世界に統一はなく混沌だけであるというのも、混沌はなく統一だけであるというのも、人間の認識能力から考えれば妥当な判断とはいえない。

世界の統一が存在することは確実である。この統一の認識は階層における依存関係の把握となる。範疇法則では範疇の相互依存を凝集と定義し、更にこの全体関連を統一と断定する。孤立した範疇は存在しない。このために範疇は含み含まれつの包含関係の中で、統一形態を保持しているものと考えられる。何よりも科学が説明不可能な直接的確実性として、この統一的事実を明示している。新しい哲学はこの科学的事実を感知し、これを記述しながら非合理的なものを含めた存在統一へ接近する努力を続けねばならない。合理的なものの統一は人為

的となる。非合理的なもの・合理的なものが同時に人間に与えられているという現象的事実に没入し、その中から自然的統一を聞きとるのが科学的態度であり、正しい体系的形而上学の在り方である。次に、非合理的なものを含めた存在統一をどのように認識するのかを問題としたい。

### 三、認識の形而上学

新しい哲学は体系の形而上学でもあり、更に認識の形而上学でもある。認識に先立って統一の体系を構成し、この範疇によって現象を認識するのでは正しい把握とはいえない。認識対象を意識現象と考える哲学においては、認識対象は意識作用、すなわち認識範疇に局限されることになる。そこで認識範疇は把握の形式であると同時に対象の形式でもあるという、同一視が観念論における真理の基準となっている。この場合、同一視における優位性は認識範疇にある。ハルトマンは真理の基準を自己の中でなく外に求めている。従って意識の外にあるものの完全な一致が真理となる。しかし人間の認識能力には限界があるから、意識内容が全対象である存在世界と完全に一致しているかどうかの判定は困難である。すなわち真理の判定に先立って意識内容も存在世界も熟知していることが前提とされる。つまり両方共、認識可能な領域に属するからである。

そこで形而上学は意識においても存在においても成立することになる。意識に関する形而上学は上からの形而上学として、存在に関する

形而上学は下からの形而上学として、これまでその在り方をめぐって考察を続けて来た。両者の同一視は真理性の成立のために望ましい結果ではあるが、認識上からも判定不可能であることがこれにより判明する。それならば両者が全く無関係なものかといえそうではない。合理性の認識がある以上、そこに何らかの一致があることを認めざるを得ない。このように認識に合理性和非合理性とが同時に存在するために、両者の部分的一致を本来の認識関係の表示と考えることができる。従って存在は合理的存在と非合理的存在とに識別される。非合理であるものは非存在ではなく、逆に存在の一部を構成している。

古い哲学は認識範疇を真理とする余り、認識範疇の外に存在するものを偽として、これを存在させてはならないと考える。逆に存在範疇を安易に真理と認めてしまうと、存在範疇に合致しない認識範疇が切り捨てられる。唯物論がこの手法を利用して、物以外の範疇をすべて排除してしまう。存在範疇は物質の原理だけではなく、他の原理を包含するものであるから、物の範疇だけを真理としてこれを他の領域に伸張することは、同一視を真理とする強行に他ならない。むしろ認識範疇も存在の一部であるから、合致しないものを排除すべき理由はない。存在範疇に合致することを真理の基準とするのは、認識理論として正当なことであるが、といってこれを人間の有限な認識現象に該当させて、不都合な他者を排斥する手段にこれを利用することは許されてはならない。人間の現実的認識能力からこれを判断し批判するならば、合理的存在と非合理的存在に識別されることは否定できない。そして

非合理的なものに関する形而上学がそこに成立する余地が存している。完全に認識不可能な、究極の深みに関する非合理的なものの存在は、形而上学的問題を構成している。それは神や靈魂についてでなく、存在するものの意味についてである。人間にとって非合理的なものであるから存在意味はないとされるが、しかし存在統一の一部であるこの非合理的なものは、それだけの存在意味を有するものと判断されねばならない。認識の形而上学において問われるのはこの判断の理由、すなわち認識不可能なものについて判断することの妥当性についてである。確かに合理的領域で存在することの意味については、少くともそれを人間が付与し統一づけたことについて理解できる。人間にとっての意味が人間に理解できるのであり、人間に無関係な意味については人間の関与するところではない。観念論的人間は常にこのように考え、人間中心の文化圏を拡大することに人間の存在価値を認知する。ハルトマンはこの観点から存在の客体化を、主観に対して対象になることと定義している。<sup>(5)</sup>

対象の存在意味は主観に対してであり、主観のない対象は無意味な存在と考えられる。そこで一切の存在者は対象である、一切の存在者は現象である、という人間中心の認識観が成立することになる。確かに認識は、何かについての把握である以上、認識は対象の存在を前提とするものである。しかし存在者は認識され始めて存在するものでない。認識以前に存在者は存在する。現象にならない、自己を顕示しない存在者もあり得る。従ってこの視点から人間中心の認識観を再考するな

らば、一切の存在者は必ずしも現象とはならないのであり、一切の存在者は対象である必要もないのである。そこで人間に認識されないもの、非合理的なもの、超客体的なもの、理念的なものが存在することの理解へと導くのは、新しい哲学・形而上学の使命となる。常に主観と対象を相対的に関連させて考察するのを廃止し、主観を超越した自体存在を前提し、このものの把握を認識作用と理解するものである。

認識対象と存在者を混同しないことが正しい把握のために要請される。認識対象は主観によって客体化されたものであるが、存在者は不可認識的なものを含め、更に主観をも包含する広く深い領域をもっている。その中では主観の優位も、物自体の理念的優越も存在しない。存在論的地平では両者の依存関係は消滅している。すなわち主観によって客体化された認識対象は主観に依存するものであるが、客体化されない把握の対象は主観に依存しないで、主観から独立に存在しているものである。従ってこの存在は認識に不依存であり、認識対象になる必要もない。すなわち認識されなくとも主観と同様に存在の一員であり、存在統一の秩序に参加していることに変わりはない。人間に依存して意味ある存在になるのではなく、人間に依存しないで独立に存在しながら、人間をも包含する全体的調和の中で存在意味を保有する超客体的存在が、人間存在と対等に存在している。

新しい哲学はあるがままの、偏見のない問題処理が要求される。人間の立場を離れ全体存在を客観的に純粹洞察できれば、現象の多様の中に存在統一を直観できるようになる。しかし人間の有限な認識能力

をもってしては統一全体を把握できる確証はどこにもない。従って形而上学はどのようにして成立し、合理的認識の彼方に残された非合理的なものを如何に処理するかが、その哲学の価値を決定する重要な問題となる。人間主観主義を離れ存在客観主義の見地から世界を眺めれば、世界はどのように見えてくるのか、それを記述するのが現象論における哲学の第一の仕事である。統一して見えるものもあれば混沌として現われるものもある。これらすべてを強引に統一解釈しないで、現われ見えるままに記述し不統一の事実はそのまま認知するしかない。確かに不統一を認知することは理論の不完全性を証明することになるが、人間の有限的能力から容認せざるを得ない事実である。これをひたすら隠蔽し、あまつさえこの除去を策謀するに至っては、人間の思ひ上がり、その極に達したといえよう。

人間の認識に無関心で、人間から独立な非合理的領域が存在統一している事実を如何にして把握できるのか、これを全体による統一と理解すれば人間の観念論的認識の押し付けとなる。それでは不可認識的なものについてどうして判断できるのか。これは認識の二律背反を構成するものである。全く認識不可能であればこれについて判断はできない。すべて認識可能であれば非合理的領域は消滅する。少なくともこの両者において二律背反は発生しないことになる。両者のどちらかに決断できない人間の認識状況が、非合理的なものの存在を予知せしめている。すなわち認識とは非合理的なものを合理化する努力、超客体的なものを客体化する過程をいう。従ってこの認識領域においては

少なくとも部分的把握の可能性を示唆するものである。ここにおいてどうしても人間の認識にはアприオリな機能のあることが否定できなくなる。

なるほど、下からの範疇分析の研究によって合理的領域から非合理的領域への類推は可能である。しかしこれは存在の同一視を根拠とする危険な思惟方法である。そこで例えば数学の公理における説明のできない明証性が、形而上学を成立せしめる基礎と考えられる。実証的合理性によって証明不可能であるから公理なのであり、むしろ数学はこの公理によって定理の真であることを証明する。このアприオリな明証性は数学だけでなく、理論物理学、生物学、心理学、精神科学、人間学の領域において認められている。形而上学は哲学だけに可能なのではなく、哲学以外の他の学問が実証的であればある程、形而上学的要素は益々増大してくる。つまり実証性・合理性が限界に突き当たる時、そこに認識されるのは非合理性の出現である。この非合理性についての学問は形而上学であるが、この学問を成立可能にしているのはアприオリな根元的洞察となる。

非合理性は存在の中になく、人間の意識の中にある。つまり人間にとって非合理的に見えるのであって、これをそのまま存在者に該当させることは人間の一方的解釈である。合理的、非合理的とは人間にとって一つの判断であり、これを真理の基準とすることはできない。しかし観念論は人間中心の価値基準で、一切の存在者を人為的統一、要請的統一、構成的統一の下に、支配・決定する世界像を担造する。し

かし存在者は人間からどのように認識されようとも存在していることに変化はなく、従って人間の所作・振舞には無関心である。そして存在者を非合理的と規制しようと合理的と規定しようと、存在そのものの在り方は独立的自己決定である。このことをハルトマンは自然的統一と名付けて、人間による体系的構想の統一から区別している。この独立的自己決定を、身近かな例を採れば身体の動きの中にも、生命の働きにおいても、または人格の発動においても、説明できないが確実な統一として実感していることである。これを哲学的表現によれば多様性の統一として定義できる。

世界が多様性を帯びながら統一していることの把握は、世界の組織に関する科学的研究によって可能である。すなわち世界には統一がなければならぬとか、世界は一者・絶対者による統一であるとかいう古い形而上学的要求に依拠しないで、世界の階層の重なり方を依存と独立の視点から範疇分析することによって、自然的統一が直観できるものである。世界の實在的構造に関する範疇法則では、この自然的統一は一擬集法則によって横の連関として説明されている。一つの層の諸範疇が対立しながら包含し合っている擬集関係は、一つの層の統一を全体として可能にする。このことの明確な理解は人間にとって不可能となつてゐる。更に階層法則では縦の連関としての再現の法則が上下の層の重なり合いを証明している。これによる四層の統一としての人間理解は一層不可能なものになる。この理解できないが認めざるを得ない厳然たる事実に対して、人間は畏敬をもってこの統一を眺めるだ



けである。しかし高慢な人間は合理化できない自然の謎を、そのまま放任することはしないで人間の論理的支配下で統制しようと空しい努力を続けることになる。

#### 四、問題の形而上学

対立しながら包含し合うという自然的統一は不可解な矛盾・二律背反であるために、これを是認することは論理法則に違反することになる。自然に対する人間の優位、存在に対する論理の優越を実証するためには、この矛盾の解決こそ望ましい方策である。そこで多様性を切捨てた上での人為的統一を、世界関連の先取りによって存在へ押し付け、これによって人間の手で解決できたことに自己満足する。しかしこれでは、あるがままに問題が解決されたことにならない。自然の問題が人間の問題にすり替えられている。つまり理論が現象分析・問題分析より先きに構築され、それに基づいて現象の局限、問題の取捨選択が行われる。この人間中心の世界観から脱却するためには、人間の作為から現象を保護する必要がある。人間に開示される世界の謎をあるがままに容認し、決してこれを無視したり改造したりしないことである。そしてこの謎の解決すら断念せざるを得ない場合もあることを承認しなければならない。

存在関係が矛盾であるというが、人間からそのように見えるだけであって、本当に存在そのものが矛盾しているわけではない。世界の謎ということも世界の本質が謎であるという意味ではなく、人間の認識

範疇では把握できない存在の一部を非合理的と断定したまでのことである。世界が多様性であり、それらが対立して見えるのは認識事実である。更にこれらが統一して見えるのもまた事実である。これら二つの事実が意味する二律背反は、飽くまで人間の側での矛盾関係を表現するもので、従って存在そのものはこのような認識像には無関係で独立した働きを営むものと考えられる。対立包含という存在統一が人間には理解できなくとも、これが人間の論理を超越した統一作用であることをアプリアリな直観によって是認することができる。この統一作用は人間の認識では手を触れることのできない存在の深みをもっており、従って認識対象とはならなくても超越的存在として予知されるものである。

問題はこの超越的存在を如何にして主観の対象とすることができ、すなわち不可認識であるこの超越的存在の把握は如何にして可能であるかである。全く認識不可能であれば問題にすらならないから、少なくとも部分的認識は可能とされる。そこで哲学は他の学問の研究成果に依拠し、そこに存在論の確実な出発点を得て、与えられた世界の多様性から展望の統一性を求めるといふ存在の基礎学となる。基礎学はこの統一を認識根拠に求めないで存在根拠の中に発見する。古い存在論は認識根拠に統一の原理を求めするために、世界を歪曲して人間中心に解釈を行なう。これに対して新しい存在論は存在中心に、世界そのものの普遍的基礎的根拠に接近しようとするものである。それにはすべての個別的学問の成果を全面的に受け入れこれを理解して、世

界全体を開かれた視点から意味づけることが必要である。哲学は孤立した学問研究であってはならない。

目的性の範疇は人間の精神層に光を当て、この優越性を充分に証明してみせる。そしてこの精神の統一を世界の統一へ転化して、擬人的世界観を成立させる。しかしこれでは世界全体を綿密に注意深く光を当てたことにはならない。上層は強くて独立で不依存であり、下層は弱くて非独立で依存的となる。この人間優位の世界観が世界の秩序と統一を混乱させている。人間こそ世界の調和と秩序の秘密に謙虚に耳を傾け、その優越性を畏敬すべきである。ハルトマンの範疇法則はこの人間の思い上りが虚構の上に築かれた空中楼閣であることを教えている。すなわち上層と下層は支配・服従関係にあるのではなく、むしろ下層は上層から独立して自己決定の自由をもつことを指摘している。逆に上層が下層に依存して、上層が弱くて下層が強いという論理が成立する。人間は世界の中にあつて一番弱い存在であることの自覚こそ、求められるべき正しい世界認識である。

人間が世界の王者として世界の存在物を支配・服従させ、これが人間の正しい在り方であることを証明するために、神を人間の権威づけに利用している。人間の上位に神が鎮座することによって、人間は益々世界組織の頂点に立つことを立証せしめている。すなわち神は世界を統一づける絶対的な支配者として人間をも支配することになるが、世界の實在的構造における人間の優越的地位に変化はない。むしろ人間以外の存在者が人間に依存することを保証し、これを正当化する権

利を与えている。人間は神の代理権者として世界を支配し統一づける使命を帯びていると自負する。しかしこの目的論的統一は人間には妥当しても、世界の事態にはそぐわない。このことの理解は下からの研究に待たねばならない。

上からの研究は世界構造を目的性の下に統一づけることにある。これに対して下からの研究は因果決定論によって世界組織を説明することになる。ハルトマンは前者にヘーゲルを、後者にマルクスを代表的研究者として挙げている。両者共に一元論的解釈によって世界の多様性を歪曲して、一方的依存関係のみを世界の実体と虚構する。範疇法則はこの依存の解明を骨子とするものであるから、目的性と因果性の正しい依存関係の把握は範疇法則の理解が前提となる。すなわち上は下に再現しないで下が上に再現することによって、因果性は変化した形で目的性の中に浸透する。目的性は因果性の中に再現していない。従つて目的性は因果性に依存し、因果性は目的性に依存しないことになる。これによって目的性を下層へ再現せしめるヘーゲルの観念論的思想は誤謬となる。しかし下から上への再現は変化の法則によって制限され、因果性の決定力は弱められている。そこで唯物論の妥当性も制限され弱められることになる。ハルトマンは観念論、唯物論共に全面的誤謬であるとはいっていない。両者が他の境域侵犯を行なうことを詰責している。

問題発生は二元論的衝突が原因であるために、この解決は一元論的二者択一を完結図式とする。しかしこの解決方法は論理的には満足で

きて世界そのものの構造を歪曲している。そこには相変らず人間中心の観念的思考が横行する。範疇法則は目的論と因果論をその妥当限界に保留し、両者を正しく位置づけることを意図している。この場合人間の認識が、世界に調和を招来せしめようとする意志に合致するから正しいというのではなく、世界の秩序が多様性のままに統一して運行しているという事実に合致するから正しいといえる。つまり範疇法則は観念的法則ではなく、世界構造そのものに則した存在論的法則である。ハルトマンがいうところの下からの研究とは決して唯物論的研究の促進ではなく、世界の事実にも則した科学的研究の実施のことである。それには従来の人間的視野・観念論的観点から分離して、世界のあるがままの科学的研究に依存し、その成果に待たねばならない。

哲学はこの成果を踏まえた上で、それらの依存関係を把握する。例えば目的性の研究は、因果律の再現が不可避であることから、目的性と因果性が矛盾し合う関係でなく、共存し合う関連をもつことを発見する。従って問題提起の原因が二元論的対立にあるとして、この対立を除去することを企図するならば、目的性の正しい追求を阻外することになるのは明確である。むしろ対立のままに相互依存関係を発見・理解することが消極的問題解決となる。世界の構造に問題があるのでなく、人間の解釈に問題が発生する。従ってその解釈上の問題解決は世界そのものの正確な理解に基づかねばならない。それを人間の側で、人間の頭の中で勝手に解決した積りになっても、それは世界そのものとは少しも関係ないものとなる。しかし人間は自己満足できる解

決方式を世界へ強要し押し付けることを始めている。人間中心の解釈に對立するものが問題発生の源泉であるから、世界を人間に依存するものへと改造するのは問題解決の営みとなる。

この積極的問題解決は人間による世界の統一づけであるから、世界からすれば余計な所業である。多様性の統一という不可解な現象を呈するとはいえ、人間が自分本位の目的性によって世界を改造する理由はない。人間に無関心で独立した存在者もあることを人間は承認しなければならぬ。因果性による自然の研究によって、人間は自然をも自分の支配下に統制しようと考え、全自然を自分の意の儘に操作しようと思図するならば、これは人間が神たんとする願望に等しい、無謀な企画である。目的性が因果性を支配・決定することであってはならない。もしそうであればそれは因果性の独立を奪うことになる。可認識的領域における因果律の適用によって自然を利用・活用しているのが人間の能力の限界であり、自然の本質まで因果律が適用されるものではない。因果律によって普遍化できない自然の神秘性が自然の形而上学を成立せしめている。科学技術の進歩がその謎に迫るが、その解明はまだほんの一部に過ぎない。

目的律、因果律は普遍性に基づく認識範疇に属している。従って普遍化できない不可認識的領域が認識範疇の彼方に無限に残存していることを黙認せざるを得ない。非合理的領域の存在は合理化できないがために謎的存在ではあるが、一つの存在であることに変りはない。非合理であるから存在しない、更に存在せしめてはならないと人間が考

えるようになれば、この人間の考え方が世界の中での問題発生の原因である。世界の出来事に偶然的なこと、神秘的なことがあることの容認が、哲学以外の科学研究の成果から可能となっている。ハルトマンは世界の階層を四つに区分しているが、それらの各々に形而上学的要素のあることを認めている。<sup>(8)</sup>すなわち物質の原子構造、有機的及び心的生命、精神的な生活において、因果律によっては説明できない謎が秘められている。この謎を合理化できる余地は幾らかあるとしても、全面的合理化は不可能である。この領域は人間の認識能力を超越して拡大している。

合理化の限界を自覚して非合理的領域に直面することは、謎の発生であると同時に形而上学の成立となる。この保証は観念論的思惟から推論したものである。科学的成果に耳を傾けた結果知り得たものである。人間の認識能力では解明不可能な程に、自然の謎は奥深く存在している。むしろ人間はこれに手を付けることさえ畏怖を感じる。そこで人間は自然の非合理的営みを心を澄まして直視し、その動きに身を委ねるしかない。人間の余計な技術操作はかえって人間の生存を危地に追い込むことになる。存在の形而上学がこのことを証明している。

## 五、存在の形而上学

問題発生の上からの形而上学と下からの形而上学との解釈学的対立にあるのではなく、各存在層が形而上学的要素を包含することにあ

る。すなわち自然科学には正確に量的規定できないものが残存し、生命科学には因果律と目的律では直接に決定できない、生命独自の決定形式をもつものが存続する。心理学には心の精神的变化を法則化できない個性的体験が持続する。つまり実験・観察の科学的手段によって解明できない心の複雑さ、深淵さが現象の背後に横たわっている。更に精神科学に至っては、個人的精神、客観的精神、客観化された精神において、普遍性の強調と共に一回性、再生不可能な特質も保持される。ここでは研究方法が科学的であるというよりは哲学的であることが要求されている。精神科学は精神哲学として精神を扱う形而上学となるがために、精神の實在的歴史的解明と同時に、非實在的非歴史的根源から由来する精神の力も認識の対象となる。

科学的手法は因果関係の普遍的把握に基づくが、これに対して哲学的手法は目的論による統一的把握を基礎とするという定義づけでは、哲学の硬直化をもたらす。哲学は精神の形而上学として、認識範疇から存在範疇へ視野を拡大すべきである。何よりも第一に認識範疇からの分離・離脱こそ望まれる。そのためには哲学は世界全体に目を向け、世界の個別化・多様化の中に相互依存を発見し、世界の中の人間の特殊な地位について自覚する試みとしなければならない。ハルトマンにおいても哲学は人間のための学問、すなわち人間学である。但し人間だけを研究するのではなく、自然全般の研究も必要である。自然研究の基礎において人間研究が可能であることの理解は再現の法則、強さの法則によって理解されている。そこで哲学は世界の統一を、範疇層

における相互依存関係の研究から発見する。

範疇法則によって説明される人間像は自然より弱くて自由ということになる。自然なくして人間は存在しない。逆に自然は人間がいなくても存在できる。人間は自然によって支えられ担われている。このように人間は独立した自由をもっているわけではない。確かに依存した自由というのは論理的矛盾ではあるが、この矛盾の表現の両立が存在の形而上学において可能となる。矛盾は問題発生の原因であるが、この矛盾解消は存在的事実に反することになる。しかしこの矛盾的事実を詳細に検討すれば、決して矛盾ではないことが判明する。人間は自然に部分的に依存するのであり、その残余の部分は自由となる。換言すれば人間は自然を素材として上部形成する自由をもつがために、自然に依存して自然から自由となる。自然は人間に再現して人間を支え、人間から依存されて強さの独立性をもつ。人間は自然を支配する自由をもたないが、それを利用する自由をもっている。

ここにおいて明確になるのは弱さの自由と強さの自由である。人間は自然から支えられて弱さの自由をもち、自然は人間から支配されないで自己決定する強さの自由をもつ。この二種類の自由が共存することとは存在の形而上学成立の条件となる。多様性の統一という存在秩序は、この多様性が尊重され保護されることが第一前提である。そのためには決定力侵犯を防止し、相互独立性を理解することである。独立性の法則、新規なもの法則がこれを可能にする。人間は自然の独立、自己決定の自由を尊重し、また自然の強さを自覚すべきである。勿論、

この強さは他を決定するのでなく、他から決定されないという意味をもつ。更に上層に対する無関心によって上層の自由が保持され、下層の再現力が形相でなく質料であることによって、上層にある新規なもの活動余地は無限なものになる。これによって人間は自然を質料として利用し、これを上部形成する文化の自由をもつが、決して自然のもつ自己決定の自由を奪ってはならないことが明らかになる。

強さとは支配力・決定力にあるのでなく、自己独立性にある。弱さとは支配され決定されることにあるのでなく、支えられ担われて自己決定力が発揮できることにある。従って人間が自然の強さを侵犯しようとするれば、自己決定力喪失によって生ずる自然の害毒に人間自ら苦しめられるのは当然の理である。自然の自浄作用は自然の自己決定の中に保持されている。人間もこの自浄作用によって生かされているのを忘れて、自然の支配を企むことをすれば、自然に代わって人間が自然の浄化作用を営まねばならなくなる。自然の偉大さとその底力を知らない人間はやがて収拾がつかなくなり、放置された害毒に犯されて自滅の道を迎えることになる。自然と人間の共存は相互の独立性尊重の上に築かれるべきである。人間の放出する汚物は自然が処理すれば再び元の清浄なものに変質して人間へと循環する。いかなる科学力をもっても、この自然の仕事を代替できるものでないことを、人間は早く思い知るべきである。

人間は対象化された自然を全自然と考え、これを認識範疇で整理し直すことで、人間の優越性を意識する。しかし人間に無関係に独立し

て存在する自然も、このことで優越性を保持している。そこへ人間は無断で侵入し、本来の自然的秩序を人間中心の秩序に変換して、自然を人間に依存させることによって人間は自然を支配したと快哉を叫ぶ。それによって人間の優越性はおろか、人間の尊厳までも潰すことになるのを気付いていない。合理性と非合理性の区分は認識範疇による人間の勝手な解釈である。人間だけがこの区分に最大の関心をもって、非合理的なものを合理化する努力を相変らず続けている。依存して自由な人間の自覚を忘れて、神ならぬ不依存の自由を謳歌する。人間だけを特別に存在の秩序から分離して、人間賛美の王国を築けると考えるのは人間の不遜な尊大さによるものである。

最近の科学技術力による人間生活の進歩・発展は、確かに昔と比べれば格段の相違を示している。しかしそれが自然の支配を確立した証拠にはならない。自然を利用して戴いているのに、人間はこれを依存させたと誤解する。依存しているのは人間であるのに、人間のもつ新規なものの優越性と独立性を人間全体に拡大解釈して、人間は強いと錯覚している。確かに人間の領域に発見できる新規なものの特色は、他の自然に認識できない精神の卓越性にある。この事実に眩惑したヘーゲルは精神を他者に不依存な実体と定義し、すべての存在を精神に依存させる観念論的世界観を樹立する。この哲学こそ人間中心の代表的観念論である。精神の形而上学を強調する余り、精神も存在の一員であることを見失っている。存在に支えられた精神の卓越性を解明するのでなければ、ヘーゲル哲学を人間中心の観念論とする批判は正しい

いものとなる。従来の観念論の欠点は独立性擁護のために依存性を廃棄することにある。そのために論理的一貫性を追求する余り、世界の実事を歪曲することになる。

世界の階層は重なり合いによって相互に関連している。精神はこの重なり合いの頂点にあって、この存在の豊富さと新規なものの充実を誇る。しかしこの理由のために他の層に侵入して、その層の範疇と代替して精神が決定することはできない。各階層はそれぞれ自己決定の存在充実を担っており、従って精神の層からの追加決定を必要としない。これによって強さの法則は上層の決定侵犯を防止し、上層からの分離・独立を保持するという役割をもつ。しかし下層に対しては依存法則によって下層の決定追加を存在成立条件としている。この下層の決定再現が階層を下から上へと関連づけ、凝集法則と相まって下層の決定形式をすべて精神へと搬入することになる。精神の存在充実はこれによって証明されるが、同時にどれか一つでも欠けると精神でなくなる。精神の独立性は極めて不安定である。しかし世界構造を変化させて自己の中に包含し、これを精神の特殊存在へと統一づける上部形成の機能は、精神独特の優越性に基づいている。

この優越性の意識は人間独自の解釈であり、各階層の存在充実からすれば無関係なことであり、関心のないことである。従って人間は一番不安定な存在であるとの自覚の上に、他の存在の決定充実を侵犯しないように、地球資源の最少限の利用で自己満足すべきである。このことが人間存在安定のために一番確実な道であると知るべきである。

そして世界の最高層に精神の領域を附加することが人間の偉大な使命であると自覚しなければならない。これによって人間は精神であるとの觀念論的定義が生ずるが、ハルトマンは人間を自然的存在者であると同時に精神的存在者であると規定する。觀念論的、唯物論的規定はどちらかに偏重するものであるから、人間の規定としては不充分である。むしろ人間は世界と同じように階層的存在者であるから、無機的存在者、有機的存在者、心的存在者、精神的存在者のどれもが適用されることになる。そこでこれら四つの層がそれぞれ探究不可能な形而上学的領域をもち、またそれらの統一が人間という不可解な形而上学的定義を生起せしめている。

ここに人間の形而上学が誕生する。四つの層の統一体としての人間は世界の構造関連と共通なものを有する。そこで人間の組織研究は世界の構造探求と一致するという、觀念論が成立することになる。しかし人間は世界関連の中での一組織であり、従って世界の中で人間の地位はどうあるべきかを問う立場にある。世界構造の上層は人間色の濃いものであり、その下層に下がれば自然色の強いものになる。人間は自然界の一員であるから、下層は自然との共通の基盤である。しかし人間の中に存する無機物有機物は自然界のそれらとは全く同一ではなく、それらの変化したものと考えられる。従って人間の中に変化した自然があるというのではなく、自然の中に変化した人間があるという觀點が望ましい。人間は自然物と共通な基盤の上に立って、それらを超越した自然的存在者なのである。

人間の組織における多様性の統一は明確な事実であるから、これを疑う哲学者は存在しないはずである。問題は世界の秩序・調和に関する事実の証明である。人間に統一があるからといって、世界にも同じく統一があると断定できるとすれば、それは人間と世界を同一視する誤りとなる。人間、動物、植物は共通の存在基礎に依存している。更に人間は動物、植物に依存する存在でもある。この依存という事実から自然の構造的統一性が求められる。それは一つの独立存在による上からの、また下からの統一ではなく、依存的階層に存する一つの存在秩序である。この存在秩序がどのようなものであるかの説明は、人間の統一体研究とは相違する、特別な研究領域に属することである。世界の形而上学は依存関係の把握による世界の統一構造の解明であるが、人間の形而上学は精神と肉体の敵しい矛盾対立による精神の優位、精神の自由を確立するにある。ハルトマンは自由を四つの階層に認識して、それぞれに自由の形而上学を成立させている。ここでは、機械的物質から生命体はいかにして自由であり得るのか、精神は肉体に依存してそれからいかにして自由であるのか、が重要な問題である。

この問題は古い形而上学が意志の自由として解明してきた問題であるが、今日まで解決のつかない形而上学的謎となっている。この永遠に解決不可能な哲学的問題を無理に解決することは問題の本質を見損なうことになる。新しい形而上学は古い存在論が問題としていたことを再び取り上げ、これに対して積極的干渉をしないで、これと距離を保って静観することを哲学的使命とする。非合理的なものを合理化す

る努力も哲学的仕事の一つではあるが、人間の力では解決不可能な非合理的なものの存在価値を世界構造の依存関係から認識し、これに人間の手を触れないで見守ることも新しい形而上学が行なうべき重要な仕事である。精神領域における豊富・充実・完成・優越の特徴は確かに認されるべき顕著な事実ではあるが、この自由な精神能力は人間の領域で妥当すべきことで、これを他の存在領域で完成・独立している存在者に押し付けるのは、人間の越権行為であり、世界構造において全く余計な仕事である。

## 六、結

新しい形而上学は解決不可能な非合理的なものに、人間が依存することを洞察する。合理的なものは人間に向かって、にとつて、に対して、存在する。人間は認識のこの対象化によつて、これらを人間に依存させる人間中心の世界観を確立したと自画自賛するが、実は人間以外のすべての存在者に人間が依存していることを自覚すべきである。

なんとすれば人間の認識範疇による区分、合理性・非合理性も存在者の両面であり、人間の認識とは無関係に存在するものの態様である。従つて人間の論理範疇から見て矛盾に思えることも存在の一つの不可欠な様相であり、むしろ人間を支え担う重要な存在者の特質と考えられる。人間も支えられ担われる存在者として、決して神に類する特別な存在者ではない。古い形而上学は独立性の研究が主要な課題であったが、新しい形而上学は依存の究明を第一の研究課題とすべきである。

依存関係が世界に与えられている基本的現象であることによって、第一哲学としての再出発が望まれる。

人間は世界の中で一番弱い存在者である。更に自然によつて支えられ担われて人間の繁栄があることを自覚すれば、人間は自然を保護・尊重して自然との共存を希求するはずである。しかし人間は自己の科学技術力を過大評価して、非合理的自然を軽視している。存在の形而上学によれば、非合理的なものも合理的なものに共に存在者であり、両者が依存・共存の関係にあることを示唆している。しかも両者が存在の秩序に参加して自然の統一を形成していることを理解すれば、人間中心の世界観は存在者としての存在者に合致しない、人間尊重の哲学ということが判明する。人間の運命は自然に委ねられている。しかも人間は自然の一員であるならば、人間が自然から分離・独立して生存できる理由がない。人間は自然の中であつて他の成員と平等・対等な生き方をすべきであり、これが新しい形而上学を共存の哲学と規定させている。

## 注

- (1) 範疇法則、ハルトマン著、杉田・永島訳、博文社刊、八十八頁
- (2) Zur Grundlegung der Ontologie (以下略、Z. G. O.) S. 38
- (3) Systematische Selbstdarstellung (以下略、S. S.) S. 5
- (4) Z. G. O., S. 43
- (5) Z. G. O., S. 105
- (6) Z. G. O., S. 115
- (7) S. S., S. 27
- (8) Z. G. O., S. 63 ff.